

經濟論叢

第148巻 第4・5・6号

哀 辞

故 堀江保蔵名誉教授遺影および略歴

G・マリーノズの外国為替論（1）	本 山 美 彦	1
19世紀末ドイツ電機工業における労働能率増進策（4）	今久保 幸 生	22
スコットランド坑夫繫縛制変遷概観（2）	加 藤 一 弘	48
アメリカ鉄鋼資本の多角的事業展開と 日米合弁企業の位置づけ（2）	石 川 康 宏	70
低開発国におけるドラーリゼイション（dolarization）	安 原 毅	87
持続的インフレーションと政府	国 宗 浩 三	104
時間選好に関する基礎的な考察	依 田 高 典	122
短期調整過程の二類型（1）	森 岡 真 史	140
追加償却会計と取替原価償却会計	藤 井 深	162

研究ノート

FASB 1976年討議資料に関する研究ノート	藤 井 秀 樹	181
-------------------------	---------	-----

追 憶 文

堀江保蔵先生を偲んで	角 山 榮	190
堀江保蔵先生を偲ぶ	山 本 有 造	195

学会記事・経済論叢 第147巻・第148巻 総目録

平成 3 年10・11・12月

京 都 大 学 経 済 学 会

【学会記事】

アルトマン教授特別講演会

1991年11月7日午後、本学特別講義室を会場として、ミュンヘン社会科学研究所 Institut für sozialwissenschaftliche Forschung (略称: ISWF) 所長 Norbert Altmann 教授の本学会主催特別講演会がおこなわれた。同教授は5年前にも本学を訪ねられ、西ドイツにおける〈労働生活の質〉をめぐる論議を紹介されたことがある。今回は「90年代におけるシステムの合理化とドイツの労働組合」 Systemic Rationalization in the 90ies and the Future of Unions in Germany というタイトルで講演され、また講演後には、学外からの研究者も含めて活発な質疑応答がおこなわれた。

教授はまず、1980年以降の大量生産産業での合理化が、〈システムの合理化〉というべき新しい特徴をそなえてきたことを説明した。それは市場から要求される生産の〈柔軟性〉と競争に耐える〈経済性〉を結合可能にする新生産方法の追求のなかからでてきたもので、企業内の全職場の最適化をはかるだけでなく、1企業の枠をこえて一方で部品供給、他方で製品の流通・販売・サービスも含めて全プロセスを垂直的に結合して調整しようとするものである。こうした方向の合理化の中では、各部分の自律と統制のバランス、生産性の上昇とそれによる利益の配分の問題があらわれ、それは枢軸となる企業の戦略とも関連する。といってもアルトマン教授の見解では、このタイプの合理化への志向は、意図的な経営戦略というより再帰的な学習過程のなかからでてきたものである。

問題は、このような型の合理化が、企業の外にある労働組合と企業（事業所）の内部に組織される経営評議会という二重の利益代表機構をもつドイツの労使関係にどのような影響を与えるかということである。アルトマン教授は、経営評議会の比重が増して労働運動も企業別になっていくという議論（しばしば「日本化」といわれる）は誤っているという。個別の事業所レベルで組織される経営評議会はむしろこのような型の合理化の前に限界を露呈しているのであり、弱体な経営評議会をサポートし、労働条件を企業をこえて平準化し、争議にうったえるだけでなく、行政や世論にはたらきかけるという労働組合の役割はむしろ増大するであろう。

教授は、ドイツの労働組合が、労働運動に冷淡な「現代的」な従業員の増加や、国際的に展開する〈システムの合理化〉への対応という困難な課題をかかえていることも指摘された。しかし私の印象に残ったことは、旧東独地域で古典的な労働問題に直面することによってドイツの労働運動はその発展を逆戻りさせられているといわれたことであった。日独労使関係比較のプロジェクトを継承されてきた教授の日本的労使関係の将来についての見解もたずねたいところであったが、それについては教授が再度来学されることを期待したいと思う。

(八木紀一郎)